



Title	ケージと日本 : 戦後現代音楽の布置
Author(s)	上野, 正章
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41327
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	上 野 正 章 うえ の まさ あき
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 4 3 2 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平成11年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学 位 論 文 名	ケージと日本 ——戦後現代音楽の布置——
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 根 岸 一 美 (副査) 教 授 山 口 修 助 教授 関 府 寺 司

論 文 内 容 の 要 旨

現在、日本においてジョン・ケージ (1912～1992) は、現代音楽の代表的な作曲家として広く知られており、特に1. 偶然性を用いた作曲技法を考案したこと、そして2. それが西洋の芸術音楽とは何かということを考える契機になったこと、この二つの面から評価を受けている。しかし彼が日本に紹介されたのは第二次世界大戦後のことである。このような問題意識に基づいて、彼の音楽ならびに思想が1945年から1970年までの時期に日本でどのように受けとめられ、どのような反応を産み出していったか、という課題に実証的に答えようとするのが、この研究の基本の目的である。

この論文はA4判全164頁 (1頁=40字×39行設定) からなり (本文1～122頁, 付録1～3 [各種演奏会記録] 123～133頁, 付録4～5 [参考文献等] 134～164頁), うち本文は年代によって三部から構成されている。第一部は、日本がアメリカの占領下にあった1945年から1951年まで。ここではアメリカ音楽の普及が積極的に推し進められたが、十二音音楽やケージの音楽は、紹介され始めていたものの、まだ散発的に言及されるにすぎなかったことが明らかにされる。第二部はケージが文章によって紹介され始めた1951年から1960年まで。ここでは十二音音楽やその発展したセリー音楽への関心が高まり、旧来の国別による音楽の区分から作曲技法に基づく区分が生じたこと、ケージの音楽について評論家の吉田秀和や作曲家の黛敏郎が評価の言説を示すようになったことが語られる。しかし1950年代に設立された秋山邦晴主宰の「実験工房」においては、ケージの音楽の演奏を目指しつつも、演奏家の姿勢が未だ熟していなかったことが指摘される。そして第三部は1960年代である。まず1961年8月に大阪の御堂会館で《ピアノとオーケストラのためのコンサート》が初演され、ついにケージの音楽が日本で演奏されることになった事実とその意義について、さまざまな文献における受容の在りようが繙かれ、さらには翌年のケージ本人の来日および彼の作品の一連の演奏会についても同様の検証がなされる。1964年の再来日の際は同行のマース・カニングハム舞踊団にたいする熱心な反応とは裏腹に、ケージそのものについての言及が少なくなっていること、しかし一方で、1960年代の後半にいたって、ケージの音楽は偶然性の音楽という作曲技法の点で明確に位置づけられ、現代音楽の地図に固定した位置を持つようになったことが論証される。

論文審査の結果の要旨

現代音楽と呼ばれる複雑な現象の社会での位置づけを、丹念な文献調査を通じて明らかにし、受容の面から掘り起こしていったこの仕事はまさに労作と評しうる。なかんずく歴史的資料の客観的な提示を通じて明確な歴史記述を実現したことは、おそらく最も評価できる点であろう。この研究について、いずれの委員も申請者のこうした誠実で根気強い仕事に対して一致した評価を示し、とりわけ本論文が現代音楽史の資料集としての価値を有し、後学のために十分貢献しうることに ついても、率直に意義を認めるものである。しかし同時に、以下のような指摘を致さなければならないであろう。第1に、文献に対して素朴な信憑を寄せているが、文字資料のいわば裏にある言説への注意も求められること。反面、方法論として掲げていながら、関連する作曲家や評論家へのインタビューが不十分であったり、その成果が生かせていないこと。第2に、三部構成のうち、第一部と第二部との区分が十分な説得力を持たないこと。第3に、客観的な記述は評価できるにしても、歴史に対する主体的な解釈が乏しく、記述が概して平面的であること。第4に、現代に至近の現象を扱うことを考えあわせれば、様々な世代の読者への配慮が必要であること。第5に、「ケージと日本」という題目からは、単に音楽のことだけを扱うのでは不十分であること。そして第6に、他の国における受容についての言及が一つもなく、比較の視点が乏しいこと、主にこのような点である。

しかしながら、この研究は単にケージについての言説データの集積にとどまらず、彼を現代音楽の「布置」において理解している点で、時代のアクチュアルな状況の読みとりという性格をも明示しており、先行研究が皆無に近い状況の中で、本論が示した先駆的な意義はきわめて大なるものと言わなければならない。ケージの作品が他の作曲家たちに及ぼした影響ないし作用という面では、申請者自身が述べているように「本論で論じきれなかった最大の問題」であると思われるが、未だケージの作品に対する音楽学的な研究がほとんどなされていなかった時代であったことを思えば、それはケージ研究そのものの今後の課題と考えるべきであるかもしれない。そうした課題を示唆しつつ、本論文は音楽学の世界にたいして充分意味ある貢献を行いうるものと判断されうる。よって、本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。